

日刊 動労千葉

1986年元旦

No.2131

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五〇六（公衆）〇四七二（22）七二〇七



闘春

国鉄千葉動力車労働組合 執行委員長 中野洋

／粉砕工着二期塚三里ノ「阻止」民営化・分割・国鉄

動労千葉の八五年の闘いは、国鉄分割・民営化阻止・十万人首切り合理化粉砕・運転保安確立・雇用安定協約完全締結を目標に、一一〇〇名組合員・家族が一丸となって決行した十一・二八―二九第一波ストライキにつぎくる。

このストライキは、国鉄労働運動の戦闘的復権とこの間の動労千葉の闘いの全成果をかけた闘いであり、なによりも「もうこれ以上は譲れない」という職場・生産点の憤怒を一点に凝縮した闘いであった。それは又、「三人に一人」の首切りを始め、国鉄労働者の人間としての存在すらも否定する理不尽極まりない暴虐に対する当然すぎる反撃の狼煙でもあった。

一一〇〇名組合員は、「スト参加者全員解雇」なる恫喝を始め、一万をこす機動隊・動労「本部」革マル・国労一部幹部をもまき込んだ公然たるスト破りなど空前のスト圧殺体制、国鉄労働運動史上未曾有の大弾圧体制にむしる闘志を燃やし、断固二四時間ストを貫徹したのである。

時を経るにしたがつて

増す輝き

このストライキがあまりにも正鵠を得た闘いであったがゆえに、たちどころに大反動の合唱が始った。しかし「ゲリラを惹起した千葉動労ストに嚴重処分」（杉浦）を始め、マスコミを先頭とした政府、自民党、国鉄官僚、動労「本部」革マル、国労幹部などの金切り声とは対象的に、国鉄を始めとす

る全国の労働者・人民から熱烈な支持・連帯の声が寄せられたのである。

そして、中曽根は「余剰人員対策」の「閣議決定」をやらざるをえず、「五千万人署名」運動は、スト後の十二月前半驚異的にピッチが上がり、実に三千万の万台を越えるに至ったのである。

実に動労千葉の十一・二八―二九ストは時間を経るにしたがつて輝きを増し始めている。

日本階級闘争総体をゆり動かした十一・二八―二九スト

このストがかちとった成果と意義は、第一に、国鉄分割・民営化の本質を赤裸々な姿で社会問題化し政治焦点化することに成功したことである。

第二は、全国鉄労働者に「やればできる」という勇氣と自信を与え、津田沼における国労組合員の決起し動労千葉加入という快拳に示さるるように、全国鉄労働者の決起に向けて突破口をきり開いたこと。

第三に、中曽根―杉浦体制との政治的力関係の変化―転換の端緒を確実にきり開いたことである。

誇り高く起つて反撃し

勝利をかちとろう

こうして、日本の全ての労働者・人民にとって大決戦の年である一九八六年をわれわれは胸が熱くなる思いで迎えた。

八六年は、日帝・中曽根体制の超反動攻撃を許すのか否か、まさに歴史的分岐の年だ。

中曽根は、二月国鉄関連法案通常国会上程―四・二九天皇六十周年式典―五月東京サミット―六月参院選（総選挙）―国鉄特別国会―十一月自民党総裁選のスケジュール、国鉄当局は一月不当処分―三月ダイ改―十一月ダイ改を通して首切りのための十万人要員合理化を強行してくるだろう。

しかし、中曽根・杉浦はともに詭弱であり、戦線は延び切っている。われわれは、自分が好きな時、好きな地点で闘えばいいのだ。

動労千葉の八六年の闘いの目標は分割・民営化阻止・十万人首切り合理化粉砕、運転保安確立の一点につぎくる。当面する課題は、不当処分粉砕・業務移管（総武緩行・快速線、我孫子線）攻撃撤回、検修合理化反対、運転保安確立、三月ダイ改阻止を中心とする第二波闘争の実現である。

そのため「一人ひとりが活動家」になる決意で飛躍をかけ鉄のごとき家族ぐるみの団結をかちとろう。

動労千葉の十一・二八―二九ストは燎原の火のごとく全国を駆けめぐっている。

今がチャンスである。われわれは奴隷の道を拒否し、誇り高く起つて反撃し勝つ道を選んだ。全国の仲間とともに勝利の日まで闘いぬこう。

一九八六年一月一日

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！